

# わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連  
217  
載

## 葬送のとき

作家、向田邦子を知っている人は今やどのくらいあるのだろうか。

脚本家として頭角を現し、その後小説を書くようになり、第83回直木賞を受賞した。多くの名作を残し、1981年に飛行機事故で急逝。まだ51歳であった。

「阿修羅のごとく」や「寺内貫太郎一家」と聞けば、若い人も少しは思い当たるかもしれない。脚本家としてラジオやテレビの世界でヒット作を次々に生み出し、小説家としても第一級であった。飛行機事故で亡くなったことを聞いたとき私は20代だったが、運命の残酷さに衝撃を受けたことは

今でも覚えている。

映画でも本でも、若い頃に出会った時と、年月を経てから接した時とは違う印象を受けることがままある。名作と呼ばれるものほどその傾向が強いように思う。

向田氏の作品も同じで、はじめて読んだかのような嬉しい錯覚に陥ることがしばしばある。作品の素晴らしさゆえか、こちらが年を取ったせいかわずれにしろ、美味しい食事を二度も三度も味わったような気になり、それはそれでとても深い味わいがあるものだ。その向田邦子没後30年記念の書物が手元にある。「向田邦子ふたたび」の

タイトルで、文藝春秋編。かつて一緒に仕事をした仲間や面識のあった作家たち、若き向田邦子のモダンな写真の数々、心から慈しんだ猫たち。そういったものが凝縮された形で一冊の本にまとめられている。発行年は2011年。向田邦子の作品



のいくつかを羨望の気持ちで読んでいた私にとっては、当時も今も魅力的な一冊であることに変わりはない。改めてページを繰ってみて、さらに驚いた。向田邦子の死を惜しむ人々の半分は、すでにこの世にいないのだ。山本夏彦、

山口瞳、吉行淳之介、野坂昭如……。向田氏が亡くなった時に書いた寄稿文なので、もはや書いた本人たちがあの世に旅立っていたとしても、それほど不思議ではない。頭では理解していても、向田氏の死を惜しんだ人々が、この間にすでに居なくなっているという事実。その感覚は、私を一瞬、異界に迷い込んだ気分になんてくれた。

先に名を挙げた大御所たちが、皆向田氏の才能を惜しみ、思い出話を語り、そうしながら彼らもまたこの世に別れを告げていく。小さな文庫本が、長い時間になんて届けてくれた人々の声を届けてくれている。この世やあの世の境い目がないかのように、私の心にさわやかに響いた。こんな素晴らしい体験はそうそうあるものではないだろう。向田氏と南米を旅したことをいくつかのエピソードとともに記したのは、

作家の澤地久枝氏である（ちなみに、澤地氏はご存命である）。当時、澤地氏の御父上が51歳で亡くなったことを聞いて、向田氏は「人間、51歳なんて若さで死んじゃいけないわよ」と釘をさすように澤地氏に言ったという話が登場する。その向田氏が、51歳で死ぬのである。澤地氏にとって、向田氏の死は言葉では言い尽くせない事件だったに違いない。

人との別れは、いつも唐突にやって来る。そう感じるのは、死を遠いところへ追いやっていってしまうのだろうか。この原稿を書いている間に、入院中の知人の訃報が入った。本人は死ぬ気はさらさらなかったと聞く。生への執着をたっぷり含んだ死者たちの思いは、しばらく空（くう）を漂い、そのうち落ち葉のごとく静かに地に還り、みずからを葬るのだろうか。イラスト・伊藤香澄